

## 杭迫柏樹の世界展に寄せて

京都造形芸術大学学長 尾池 和夫

(第二十四代京都大学総長、地球科学)

杭迫柏樹の世界が展開される鶴屋百貨店は、日本最大規模と言われる売り場を持つ熊本の老舗であり、二〇一七年に創業六十五周年も迎える。その記念に特別企画としてこの展覧会が実現した。民間主導による企画で生活に復活する書と言葉を九州のらびびとに紹介したいと、長崎県諫早市を拠点に九州の美術を発信し続ける山下画廊の代表取締役社長である山下博之氏がこの展覧会の準備に奔走された。

書は大地の恵みである。東洋の文化である書は、王羲之や空海の時代から現代の杭迫柏樹に至るまで、大地の恵みを受けながら、世界の人々に感銘を与え続けてきた。文房四宝に加えて水があり、書家が坐して書が生まれる。

大地を構成する岩盤から硯が生まれ、大地が育む植物からの煤と大地に育つ動物からいたたく膠で墨が生まれ、大地の恵みによる三椏や楮と水から紙が漉かれる。九州

の大地は、ときに震災を、そして火山災害や洪水災害をもたらすことがあるが、人びとは災害から力強く復興して、また悠久の歴史をつないでいく。

杭迫柏樹は静岡県森町に生まれた。京都に住み、王羲之の書法を基礎に空海の書等を研鑽し、書家として独自の世界を展開してきた。『王羲之書法字典』（二玄社）を出版し、日本藝術院賞をはじめ多くを受賞しながら、書の歴史を大きく展開しようとする。書を育てる六十年の研鑽から、杭迫柏樹は、日本の公共の場所にもっともっと書を飾ろうと提唱する。この考えこそ、山下博之社長が言う、生活に復活する書と言葉という考えに呼応するものである。

熊本の大地に、杭迫柏樹の静かな二次元の世界が出現する。そしてこの展覧会が、無限の時間と空間を超越して、杭迫柏樹の世界が人々に感銘を与え続ける場となることを切に願っている。

二〇一七年二月四日 立春